

日本語の格助詞「を」の省略について
— 有生性と定性の関与の可能性 —

皆島 博

1. はじめに

日本語には、名詞に付いてそれが他動詞の直接目的語であることを標示する「を」という格助詞（対格の標識）がある。

(1) 太郎は花子をを殴った

ところで、この格助詞「を」は談話・会話体においてしばしば省略されることがある。

(2) a. 代議士になったつもりで、がんがんお酒 ϕ (を) 飲んでよ [注1]

b. 大井さん、どこでフランス語 ϕ (を) 勉強したの

これに対して、格助詞「を」が省略しにくい、あるいは省略できないという場合もある。

(3) a. 今日はタケシを呼び出して遊んじまうか

b. ?今日はタケシ ϕ 呼び出して遊んじまうか

c. きみの授業が厳し過ぎる、きみを転勤させろって電話が秘書部だの人事部だのに入ってるらしいぞ

d. *きみの授業が厳し過ぎる、きみ ϕ 転勤させろって電話が秘書部だの人事部だのに入ってるらしいぞ

これらの例を観察してみると、格助詞「を」の省略は全く恣意的に行われているので

はなく、何らかの原理に支配されているようにも思われる。これらの格助詞「を」の省略については、これまでもいくつかの規則が提案されてきているようであるが、本論はこれまでに提案されてきた規則とは別のレベルで、口語体において i) 格助詞「を」を省略しにくい名詞句は有生性の高い名詞句であると言えるか、そして ii) 省略しにくい名詞句は定性の高い名詞句であると言えるかという観点からの考察を行うことを目的とする。

2. 先行研究概観

日本語の格助詞「を」の省略については、既に幾つかの先行研究 (Alfonso(1966), 渡辺(1971), 鈴木(1972), Sakuma & Motofuji(1980), Masunaga(1988), 丹羽(1989) など) がある。以上の先行研究をまとめてみると、格助詞「を」の省略は主として次の4つの観点から説明されてきたと言える。しかしながら、有生性あるいは定性の関与という一般言語学的な観点からの説明は筆者の知る限りほとんどなかったと言ってよいと思われる。

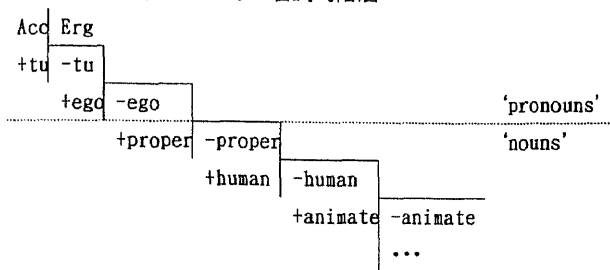
- I) 形態論的な側面に関する説明：格の論理的関係による説明（純粋な文法格のみ省略される）。
- II) 統語論的な側面に関する説明：語順（文中の深い位置にある場合（ただし、既知性が低い場合）省略されやすい）。
- III) 情報構造の側面に関する説明：主題性、既知性など。
- IV) 文体論的な側面に関する説明：
 - i) 会話体そのものの特性：くだけた、短い表現で省略されやすい。
 - ii) 文体論的な価値：ニュアンスの相違を生じさせるため省略される。

3. 有生性の階層

世界の諸言語の代表的な格標示のパターンには、能格型と対格型 [注2] とがあるとされている。しかしながら、能格型格標示を持つ言語について見てみると、この型の

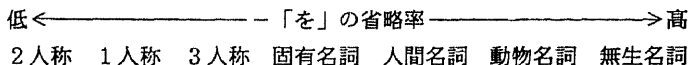
言語の全ての名詞句に能格型の格標示が現れるわけではなく、ある種の名詞句には対格型の格標示が現れることがある。これが分裂能格性(split ergativity)といわれるものである。例えば、オーストラリア原住民語では、名詞の格組織には大体において能格型の標示が現れるが、代名詞の格組織には大体において対格型の標示が現れると言われる(Dixon & Blake 1979:6)。このような現象を支配する原理として提案されたのがいわゆる Silverstein(1976)の「名詞句階層」、すなわち有生性の階層である。

(4) Silverstein(1976:122)の名詞句階層



この階層が示しているのは、「2人称→1人称→3人称→固有名詞→人間名詞→動物名詞→無生名詞」の順番で、すなわち階層の上の方から対格型の格標示が現れやすく、それとは反対に階層の下の方からは能格型の格標示が現れやすいということである。このことを日本語に当てはめて考えてみると、日本語は対格型の格標示を持つ言語〔注3〕であるから名詞句階層の上位にある名詞句ほど、即ち有生性の高い名詞句ほど対格の標識が現れやすく（「を」の省略の頻度が低い）、これに対して有生性の低い名詞句ほど対格の標識が現れにくい（「を」の省略の頻度が高い）のではないかということが予測される。

(5) 「を」の省略の頻度と有生性の階層との間の予測される相関関係



このように、日本語でも格助詞「を」の省略という現象は、有生性と関係がある可能

性が高い。というのは、有生性の低い名詞句は能格型の格標示（直接目的語が無標）が現れやすい名詞句だからである。

4. 対格標示に関与する有生性

4. 1. 有生性が関与する現象

上で日本語における対格標示（格助詞「を」の省略）を支配する原理の一つとして、有生性の関与を示唆した。しかしながら、日本語以外の言語でも対格標示が有生性に支配されるという現象は広く見られる(Comrie 1981, 1989[1992]:141)。例えば、ロシア語では、Ia型曲用の男性名詞は、有生の場合、別の対格標示(-a)を取るが、それ以外では取らない(Comrie 1981, 1989[1992]:141, 142)。

(6) a. Ja videl mal'čik-a.

私 見た 少年-対格「私は少年（有生）を見た。」

b. Ja videl begemot-a. 「私はかば（有生）を見た。」

c. Ja videl dub. 「私は樫（無生）を見た。」

d. Ja videl stol. 「私はテーブル（無生）を見た。」

この現象は、日本語の対格標示（格助詞「を」）の省略と全く同列のものとして扱うことはできないであろう。しかしながら、ロシア語は有生性の高い名詞句ほど対格標示が義務的になるという点で、有生性の高い名詞句ほど対格標示が省略しにくくなると思われる日本語と共通の原理の支配を受けていると思われ、非常に興味深い。

4. 2. 有生性に加えて定性が関与する現象

一般言語学的に直接目的語の対格標示に有生性が関与しているということは、十分可能性のあることのように思われる。しかし、対格標示に有生性だけでなく定性も関与しているという言語もある。例えば、ヒンディー語では人間の直接目的語は対格を表す後置詞のkoを取るが、これは定・不定に無関係である、一方で無生物の直接目的語は不定ならばkoを取らず、定ならばkoを取るのが普通である(Comrie 1981, 1989[1992]:143)。

- (7) a. Aurat bacce ko bulā rahī hai.
 女 子供 対格 呼んで 進行相 いる
 「女はその／ある子供を呼んでいる」
- b. ?Aurat baccā bulā rahī hai.
 斜格形
- c. Un patrǝ ko paṛhie.
 それらの 手紙 対格 読む-丁寧「それらの手紙を読んで下さい」
- d. Ye patr paṛhie.
 これらの 手紙 読む-丁寧「これらの手紙読んで下さい」
- e. Patr likhie.
 手紙 書く-丁寧「手紙（複数）書いて下さい」

また、これと類似の現象はスペイン語でも見られ、スペイン語では直接目的語の標示をする前置詞 *a* が定性の高い人間名詞にしか用いられないという (Comrie 1981, 1989[1992]:144)。

- (8) a. El director busca el carro.
 「その支配人は、その車を求めている。」
- b. El director busca a un empleado.
 「その支配人は、ある（特定の）事務員を求めている。」

これに対し、直接目的語の標示に関して有生性に関係無く名詞句の定・不定がその条件になっている言語もある。例えば、トルコ語では定の直接目的語は特別の対格接尾辞 *-l* を取り、ペルシア語では定の直接目的語が特定の対格接尾辞 *-ra* を取る (Comrie 1981, 1989[1992]:142)。

- (9) a. Hasan öküz-ü aldi. (トルコ語)
 ハサン 牛 対格 買った「ハサンは牛（定）を買った」

- b. Hasan bir öküz aldı.
ハサン ひとつの 牛 買った「ハサンは1頭の牛(不定)買った」

(10) a. Hasan ketâb-râ did. (ペルシア語)
ハサン 本 対格 見た「ハサンは本(定)を見た」

- b. Hasan yek ketâb did.
ハサン ひとつの 本 見た「ハサンは1冊(不定)の本見た」

これらの言語の例を見ると、日本語でも対格の標示(格助詞「を」の省略)について考える場合に、有生性のみならず、定性についても考慮する必要性は十分高いと思われる。したがって、以下では日本語の対格標示における有生性の関与を中心に、さらに性の関与についてもその可能性を検討していくことにする。

5. 格助詞「を」の省略における有生性の関与の可能性

5. 1. 有生性の関与の可能性

ここではまず日本語の格助詞「を」の省略に、有生性がどのように関与しているかということを検証する。

(I) 人称代名詞における「を」の省略: ここでいう人称代名詞とは、1人称代名詞が「私、僕、俺、自分…」、2人称代名詞が「あなた、君、おまえ…」そして3人称代名詞が「彼、彼女、その人、奴、あいつ、あれ…」などで、かなり広い意味におけるのを人称代名詞として認定した。

それにもかかわらず、今回調査したテキストから収集したデータ数は他の名詞と比べて少なめであった。しかし、少なくとも今回のデータの中で見る限り「を」が省略されていた人称代名詞はほとんどなかった。

- (11) a. …父は私を医者にするか、あるいは… [1人称]
b. …ひとりだちしたきみを見たら、きっと喜んでくださるよ [2人称]
c. 僕も、彼を羨ましいと思うことがありますよ [3人称]

d. えっ、先生、あいつを放っとくの [3人称]

(II) 名詞における「を」の省略

②固有名詞：人称代名詞よりはデータ数は多かったものの格助詞「を」の省略率はかなり低かった。

- (12) a. 敏美、あんた、キャビンをやりながら、山田君を手伝ってちょうだい
b. 山岡さんをお見かけしませんでしたか？

③人間名詞：データ数では固有名詞よりもやや多いという程度であるが、省略率の方は少し高くなった。

- (13) a. 彼は芸術家を育てるのが旨いんだ
b. 先刻の女を見なかったですか

④動物名詞：今回調査したテキストのジャンルによるのかも知れないが、データ数が若干少なくなった。

- (14) a. じゃあ訊くが、盲導犬を機内に持ち込む場合、犬の体重は計量の対象になるかね
b. ほう、セミを買ってもらったのか

④無生名詞：ここでいう無生名詞には抽象名詞や地名なども含む。ただし、数量名詞（「千円」「四日」など）や動作名詞（「勉強をする」「旅行をする」など）は除外している。これに関しては相当数のデータを集めることができた。

- (15) a. まず親指と人差し指でフォークを持つ
b. だけど、ドライ・アイスを入れてちゃんと保管しておきます
c. なんだ、制服を着てないのか
d. お祭りのとき、おみこしをかつぎますか

5. 2. 格助詞「を」の省略率に対する有生性の関与

上の5.1.では有生性にかかわらず格助詞「を」は省略され得るということを見てきた。そこで、ここでは格助詞「を」の省略率を示すことにより、有生性が日本語の対格標示（「を」の省略）を支配しているかどうかを検討する。

なお格助詞「を」の省略率とは、ある名詞句について省略数（名詞+ ϕ の数）を全体数（「名詞+ ϕ 」の数+「名詞+を」の数）で割ったものであり、百分率で示してある。

名詞句	意味成分	省略数/全体数	省略率(%)	
代名詞	1人称	0/ 29	0.0	} [人称代名詞] 1/109(0.9%)
	2人称	0/ 26	0.0	
	3人称	1/ 54	1.9	
名詞	固有名詞	5/ 103	4.9	} [有生名詞] 36/321(11.2%)
	人間名詞	19/ 144	13.1	
	動物名詞	12/ 74	16.2	
	無生名詞	398/1528	26.0	

この表から日本語における格助詞「を」の省略の頻度の階層を示すと次のようになる。これを見ると（5）で予測したような階層とは、特に人称代名詞に関して、少し異なった結果が得られたことになるが、名詞に関しては大体において予測どおりの結果が得られたといっていよいであろう。

(16) 格助詞「を」の省略の頻度の階層

1人称 = 2人称 < 3人称 < 固有名詞 < 人間名詞 < 動物名詞 < 無生名詞
 [人称代名詞] < [有生名詞] < [無生名詞]

6. 格助詞「を」の省略における定性の関与の可能性

6. 1. 定性の関与の可能性

次に日本語の対格標示の支配に定性がどのように関与しているかということを検討す

ることとする。日本語の場合、英語などとは異なり「定」という範疇は定冠詞や不定冠詞によって明示的に標示されるのではなく、談話の文脈に依存して決定される部分が多い。本論では名詞句の定性について簡単ではあるが次のように定義しておく。

- (17) 「定」の名詞句とは、特定の談話において話し手と聞き手の双方、または話し手の方が、その名詞句が何であるかを、他のものと区別して明確に規定できる名詞句である。〔注4〕

ただし、日本語においても原則として人称代名詞や固有名詞は「定」である。したがって、ここでは人称代名詞と固有名詞については例を示さない。それ以外の人間名詞、動物名詞そして無生名詞については次のような例が収集された。

①「定」の名詞句における格助詞「を」の省略

- (18) a. またなにか起こすと困るので、あの女をエコノミーの最後部に移そうと思うんですよ〔人間名詞〕
b. 先刻の女 ϕ 、見なかったですか〔人間名詞〕
c. 知りませんが、中年の女性のタクシーで、しかも隣に犬をのせているんです。〔動物名詞〕
d. うっかりこんなクソヒラメ ϕ お客さんに出しちゃったらどうすんだよ、ええっ!!〔動物名詞〕
e. このワゴンを組みたてたのは、だれだ〔無生名詞〕
f. その旅券 ϕ 、返してよ〔無生名詞〕

②「不定」の名詞句における格助詞「を」の省略

- (19) a. この頃、密輸には女を使うんだってよ〔人間名詞〕
b. 私、学校でオチケンにいたんですけどね、お坊さん ϕ 見ると、どうしても寿限無って落語、おもいだしちゃうんですよ〔人間名詞〕
c. バリに女のタクシーは何百台といますよ。犬をのせてるタクシーもお

- なじで、何百台じゃきかないかもしれないな [動物名詞]
 d. きゃーっ、あたし魚釣るの初めてなんですっ！！ [動物名詞]
 e. 毎朝鏡を見たら、必ず笑ってみろ [無生名詞]
 f. おれ、おふくろに金お貰ってきたんだ [無生名詞]

このように、日本語では格助詞「を」の省略は名詞句の定・不定にかかわらず生じ得る。これが定の直接目的語に対格の標示が義務的なトルコ語やペルシア語とは異なっている点である。したがって、名詞句の定・不定と格助詞「を」の省略の頻度との相関関係について考慮することが必要である。これについては次の6.2.で言及する。

6. 2. 格助詞「を」の省略率に対する定性の関与

上の6.1.で示したように、日本語においては格助詞「を」の省略は名詞句の定・不定にかかわらず生じる。以下に名詞句の定・不定とそれに対する格助詞「を」の省略率について示す。

名詞句	意味成分		省略数/全体数	省略率(%)
代名詞	1人称	定	0/ 29	0.0
		不定	0/ 0	0.0
	2人称	定	0/ 26	0.0
		不定	0/ 0	0.0
	3人称	定	1/ 54	1.9
		不定	0/ 0	0.0
名詞	固有名詞	定	5/ 103	4.9
		不定	0/ 0	0.0
	人間名詞	定	12/ 111	10.8
		不定	7/ 33	21.2
	動物名詞	定	5/ 58	8.6
		不定	7/ 16	43.8
	無生名詞	定	222/1198	18.5
		不定	176/ 330	53.3

この結果から、格助詞「を」の省略に関して、およそ次のような傾向性がうかがえる。したがって、日本語でも定性が関与している可能性は十分にあると思われる。

- (20) a. 定名詞句が不定名詞句より格助詞「を」の省略の頻度が低い
- b. 定・不定名詞句ともに有生性が高いほど格助詞「を」の省略の頻度が低くなる

7. おわりに

本論では有生性（そして定性）が格助詞「を」の省略にどのように関与しているのかということを中心に検討してきた。第一の問題であった「格助詞『を』を省略しにくい名詞句は有生性の高い名詞句であると言えるか」ということについては、上の結果から概ね次のことが言えるであろう。

- (21) 有生性の高い名詞句ほど格助詞「を」が省略しにくくなり、有生性の低い名詞句ほど格助詞「を」が省略しやすくなる

また、第二の問題であった「格助詞『を』を省略しにくい名詞句は定性の高い名詞句と言えるか」ということについては、上の結果から概ね次のことが言えるであろう。

- (22) 定性の高い（そして有生性の高い）名詞句ほど格助詞「を」が省略しにくくなる

最後に、本論は格助詞「を」の省略に関して、決して包括的に述べたものではない。しかしながら、これまで提案されてきたいくつかの規則とは別の一般言語学的観点から、有生性そして定性という二つのパラメーターが、日本語の格助詞「を」の省略という現象において、二つの相互作用として関与していることの可能性を検証しようとしたものである。

【注】

- *) 本論は第104回日本言語学会大会（於神田外語大学 1992年6月7日）での口頭発表資料に基づき松本克己先生のご指導・ご助言を仰ぎ大幅に加筆・修正したものであります。ここに記して謝意を表します。
- 1) 格助詞「を」の省略の印として‘ ϕ ’を用いる。
 - 2) 能格型格標示とは、Dixon(1979:60-61)によれば「自動詞構文の主語が他動詞構文の目的語と同じように扱われる」タイプの格標示である。自動詞の主語をS、他動詞の主語をA、そして他動詞の目的語をOで表すとすれば、能格型格標示においては{A} 能格 \neq {S=O} 絶対格という格の分布が現れる。これに対して、対格型格標示においては{A=S} 主格 \neq {O} 対格という格の分布が現れる。例えば、能格型格標示を持つバスク語(Comrie 1978:333)における自動詞と他動詞文では他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ格標示(ゼロ格)で現れる。これに対し、対格型格標示をもつラテン語(Comrie 1978:331)では、他動詞文の主語と自動詞文の主語が同じ格標示(ゼロ格)で現れる。このように、能格型格標示を持つ言語では原則として絶対格がゼロ格(無標格)(Dixon 1979:71, 1987:3)で、能格が有標格であるのに対して、対格型格標示を持つ言語においては主格がゼロ格(無標格)で、対格が有標格として現れる。
 - 3) 日本語においてもS=A \neq Oという対格型の格標示が現れるからである。ただし、日本語の他動詞・自動詞文の主語はゼロ格ではないが、有標性(markedness)に関しては無標の格である。
 - 4) Lyons(1977:179)参照。

【参考文献】

- Alfonso, A. (1966). Japanese Language Patterns, Vol. 2., Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics.
- Comrie, B. (1981, 1989[1992]). Language Universals and Linguistic Typology. The University of Chicago Press. (松本克己・山本秀樹訳『言語普遍性と言語類

型論』ひつじ書房.)

Dixon, R. M. W. (1979). 'Ergativity', *Language* 55, 59-138.

_____ (1987). 'Studies in Ergativity: Introduction', in *Lingua* 71, 1-16.

Dixon, R. M. W. & Blake, B. J. (eds.). (1979) Handbook of Australian Languages, Volume 1, John Benjamins B. V.

Lyons, J. (1977). Semantics, Volume I, Cambridge University Press.

Masunaga, K. (1988). 'Case Deletion and Discourse Context', in Poser, W. J. (ed.) Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax, Center for the Study of Language and Information.

皆島博(1992). 「日本語の格助詞『を』の省略にみられるSilversteinの名詞句階層の反映」第104回日本語学会大会口頭発表原稿(1992年6月7日於神田外語大学).

Sakuma, K. and F. T. Motofuji. (1980). Advanced Spoken Japanese: Tonari no Shibafu, Institute of East Asian Studies.

Silverstein, M. (1976). 'Hierarchy of Features and Ergativity', in Dixon, R. M. W. (ed.), Grammatical Categories in Australian Languages, Humanities Press.

丹羽哲也(1989). 「無助詞格の機能－主題と格と語順－」『国語国文』第58巻第10号, 38-57.

渡辺実(1971). 『国語構文論』塙書房.

渡辺重幸(1972). 『日本語文法形態論』むぎ書房.

【資料テキスト】

相原コージ(1987). 『コージ苑1, 2, 3』小学館.

雁屋哲・花咲アキラ(1985). 『美味しんぼ1, 3, 4, 6, 12』小学館.

平岩弓枝(1981). 『花の影』文藝春秋社.

深田裕介(1983). 『スチュワーズ物語』新潮社.

村松栄子(1992). 『至高聖所』福武書店.

夢枕獏(1985). 『悪夢展覧会』徳間書店.

On the Ellipsis of Japanese
Case Particle "o"
-A Possibility of Relevance
to Animacy and Definiteness-

Hiroshi MINASHIMA

The accusative case particle "o" is often deleted in Japanese sentences, especially in colloquial speech.

- (1) a. Daigishi-ni natta tsumoride, gan-gan osake ϕ (o) nonde-yo.
b. Oi-san, dokode furansugo ϕ (o) benkyo-shita-no?

In some cases the case particle "o" is hard to be deleted or cannot be deleted.

- (2) a. Kyo-wa Takeshi-o yobidashite asonjimauka.
b. ?Kyo-wa Takeshi ϕ yobidashite asonjimauka.
c. Kimino jugyo-ga kibishi-sugiru, kimi-o tenkin saserotte denwa-ga hishobudano jinjibudano-ni haitterurashi-zo.
d. *Kimino jugyo-ga kibishi-sugiru, kimi ϕ tenkin saserotte denwa-ga hishobudano jinjibudano-ni haitterurashi-zo.

Given these examples it seems that these phenomena are governed by certain principles. Thus the purpose of this paper is to examine the following problems in Japanese colloquial speech: i) Are NPs without accusative particle "o" have high animacy? and ii) NPs without accusative particle "o" have high definiteness?

(原稿受理日 1993年 3月31日)